北九州市立大学

文　学　部　紀　要

第 93 号

文学的トポスとしてのヨハン・モリッツ・ルゲンダス
―カルロス・フランス『僕の目で君自身を見ることができたなら』を中心に―

富　田　広　樹

北九州市立大学文学部

比較文化学科

２０２３

文学的トポスとしてのヨハン・モリッツ・ルゲンダス
―カルロス・フランス『僕の目で君自身を見ることができたなら』を中心に―

富田　広樹

real [...]
A. *adj*. I. 1. a. Having an objective existence;
actually existing as a thing.
The Oxford English Dictionary

要　　旨

アメリカ大陸を旅してその風物を克明に記録した画家ヨハン・モリッツ・ルゲンダスの人生を題材として、近年複数の小説作品があらわれた。文学的トポスとしてのルゲンダスが持つ魅力を検討する。絵画におけるロマン主義への転向と、カルメン・アリアガダとのあいだに交わした手紙が発見されたことによって文学的ロマン主義を体現する人物となったルゲンダスは、占有や収奪といった一方的な方法によらずしてヨーロッパとアメリカというふたつの世界を横断し、架橋する可能性を示すこととなった。

キーワード

カルロス・フランス、ヨハン・モリッツ・ルゲンダス、チャールズ・ダーウィン、カルメン・アリアガダ、ロマン主義

はじめに

1835 年 2 月 20 日、チリの都市コンセプシオン近辺を震源とする地震が発生する。表面波マグニチュード 8.5、コンセプシオンは壊滅的な被害を受けた。アルゼンチンとチリの国境に位置する南米最高峰アコンカグア山で雪崩が発生し、ふたりのヨーロッパ人が遭難する。ひとりは『ビーグル号航海記』や『種の起源』で名を馳せることになるイギリスの地質学者チャールズ・ダーウィン。そして、もうひとりは南米大陸を旅しながら絵を描きつづけたドイツ・アウクスブルク出身の画家ヨハン・モリッツ・ルゲンダス。

これは、チリの作家カルロス・フランスが 2015 年に発表した小説『僕の目で君自身を見ることができたなら』の中での出来事であり、完全なる虚構。とはいえ、チャールズ・ダーウィンがビーグル号に乗って世界を一周する調査旅行の途上でチリに滞在したことは事実であり、コンセプシオ

ンの大地震についてもその記録が『ビーグル号航海記』にあらわれる。

> 二月二〇日――この日はバルディビアの年代記にあっても記憶される日になった。いちばんの長老にすら、これが最高にすさまじかったと思わせるほどの大地震にぶつかったからである。地震が発生したとき、わたしは海岸あたりの森の中で横になり、休息をとっている最中だった。だしぬけに地面が揺れて、二分間続いた。実際につづいた時間よりもずっと長く感じられた。地盤が動くのがよくわかった[1]。

フランスの作品では、遭難したダーウィンとルゲンダスがアコンカグア山の内部で神秘体験をともにし、そこからダーウィンが進化論の核となる霊感（インスピレーション）を受けることになる。

もういっぽうの登場人物であるルゲンダスもまた、コンセプシオンで大地震が起こったとき、チリに滞在していた。近年、彼についての詳細な伝記を発表したメキシコの歴史家エフレン・オルティス・ドミンゲスはつぎのように書いている。

> 二世紀が過ぎてなお、ルゲンダスはわたしたちに景色の見方を教えた巨匠であり続け、世界にわたしたちのイメージを供する名高い画家であり続け、歴史においては、わたしたちの祖先の日常生活を記録した年代記作家であり続けている[2]。

自然や風景をあるがままに眺めることはできない。目は欺くものであり、欺かれるものでもある。視覚が生得的なものであるとしても、見て理解する／理解したつもりになることは後天的で、訓練や経験によって会得される。素朴に見る、ということは不可能であり、ものの見方、見え方は文化的につくりあげられた結果としてあるにすぎない。同様に、旧世界の人間が新世界であるアメリカ大陸の自然を壮大だと口にするとき、それは自然そのものを見て発しているというよりも、壮大なものとしてアメリカ大陸の自然を見る能力が言わしめているにすぎない。さらには、ヨーロッパ人が驚嘆した自然を彼らが到来する以前より目の当たりにしていた人々や移民たち、現地で生まれることになる入植者の子孫が、その文化的な感受性を継承し反復することになる。

ルゲンダスは長年にわたってラテンアメリカ諸国を旅行し、その風物を描いた。滞在中あるいはヨーロッパに帰国してから手がけた絵画は 700 点、素描は 5000 点、水彩画は 300 点を越える。その数は圧倒的なまでに膨大で資料的価値がきわめて高い。先に引いたオルティス・ドミンゲスの言葉は、今日にいたるまでわたしたちがラテンアメリカ世界をどのように見るか、ということを規定

---

[1] ダーウィン、チャールズ・R『新訳　ビーグル号航海記』荒俣宏訳、平凡社、2013 年、下巻 104 ページ。

[2] Ortiz Domínguez, Efren. *Johann Moritz Rugendas: memorias de un artista apasionado*. Bógota: Luna Libros, 2013. [https://a.co/5VU2tM4]

する上でルゲンダスの作品群がはたした重要性を指摘するものである。

興味深いことに、2000 年代に入ってからルゲンダスを主人公に据えた小説が相次いで発表されている。

2000 年　セサル・アイラ『風景画家の人生の挿話』
2015 年　カルロス・フランス『僕の目で君自身を見ることができたなら』
2016 年　パトリシア・セルダ『ルゲンダス』

セサル・アイラは多作で知られるアルゼンチンの作家で、アルゼンチン滞在中のルゲンダスが落雷を受けて重傷を負いながらも絵を描くことに執念をみせたエピソードを扱っている。フランスの作品は 2015 年に第二回のマリオ・バルガス・ジョサ文学賞[3]に輝いた。パトリシア・セルダもチリ出身だが、ドイツとチリを往還しながら作品を書いている。ふたりの作家がチリ出身であることが目を引くが、その理由はフランスとセルダがともにルゲンダスがチリ滞在中に出会った女性との交流を題材にしているからである。

異邦の画家を取りあげて、これほど速いペースで複数の作品があらわれていることは、きわめて異例のことといえる[4]。アメリカ大陸の風景の見方をつくった画家としての価値を超えたなんらかの魅力がルゲンダスという人物に認められるということだろう。本稿ではカルロス・フランスの作品を例にその引力の中心を検討し、文学的トポスとしてのヨハン・モリッツ・ルゲンダス像に接近することを目的とする。

旅する画家

1802 年 3 月 29 日、ヨハン・モリッツ・ルゲンダスは帝国自由都市アウクスブルクに誕生した。ルゲンダスという姓はドイツ語らしからぬが、元をたどれば一六世紀なかばに中央ヨーロッパにやって来たユグノーの家系であり、アウクスブルクの和議で知られるこの帝国自由都市に移り住んだことは、一家の信仰と無関係ではあるまい。

一族からは芸術家、職人が輩出した。戦争画で知られるゲオルク・フィリップ一世（1666−1742）、その息子ゲオルク・フィリップ二世（1701−1774）はヨハン・モリッツの曾祖父、祖父にあたる。父のヨハン・ローレンツ二世（1775−1826）はアウクスブルクの美術学校で教壇に立った。二世紀を超える画家の家系にルゲンダスは生を享けた。父のもとで絵を描きはじめ、1809 年から

[3] 2014 年にはじまったスペイン語で書かれた小説に贈られる文学賞。書き手の国籍は問わない。二年に一度選考がおこなわれる。歴史は浅いもののスペイン語圏でもっとも重要な文学賞のひとつに数えられる。

[4] ほかにも小説ではないが、2017 年に長編映画 *Ausencia*（クラウディオ・マルコーネ、リウ・マリノ監督）がチリで制作されている。

は一家と親交のあったアルブレヒト・アダム（1786−1862）のもとで修行をはじめている[5]。その後ミュンヘンのアカデミーでロレンツォ・クアーリオ二世（1793−1869）のもとに研鑽を積んだ。

ルゲンダスはその生涯で二度アメリカ大陸に渡っている。一度目は 1822 年 3 月から 1825 年 5 月まで、ロシアの外交官でもあったドイツ人ゲオルク・ハインリッヒ・フォン・ラングスドルフ（1774−1852）の調査旅行に同行してブラジルを訪れた。当時ブラジルが置かれていた不安定な政治状況のために思うように進まぬ調査や、ラングスドルフとの不仲もあり後に調査隊を離れることになるが、しばしブラジルに滞在して作品を描いた。二度目は 1831 年 7 月から 1846 年の 8 月まで、メキシコ、チリ、ペルー、ボリビア、アルゼンチン、ウルグアイ、そしてブラジルを訪れた。

最初の渡航を終えてヨーロッパに帰国すると、ルゲンダスの描いた新大陸の風景や文物はヨーロッパの知識人、とりわけ博物学に関心をもつ人々に驚嘆をもって迎えられた。ルゲンダスの作品をもとに制作されたリトグラフを収める『ブラジルのピクチャレスクな旅』（1827−1835 年まで分冊出版）は話題をさらい、自身南米大陸を旅したことのある碩学アレクサンダー・フォン・フンボルトは彼の絵画を賞賛、自身の著作に挿絵として採用し、再度アメリカ大陸を訪れてよりおおくを描くようにルゲンダスを鼓舞するとともに旅程についても助言を与えた。

1830 年 3 月、フンボルトはルゲンダスに宛ててつぎのように書いている。

> あなたがアメリカ大陸に旅をするという決心を嬉しく思いますし、さまざまな景観を通じてあなたは活き活きと学び、風景画の新時代を切りひらくでしょう。ですが、あなたのアメリカ大陸はブラジルでもなければクマラでもなく、マグダレナ川でもなければ西インド諸島でもありません。あなたが向かうべき地方はヤシの木が樹木状のシダやサボテン、雪を戴く丘や火山とともにある場所、あるいは具体的に言えば北緯 10 度から南緯 15 度のアンデス山脈です。〔中略〕温暖な気候の地方、ブエノスアイレス、チリ、雪も火山もない森林地帯、オリノコ川やアマゾン川、また小さな島々にも気をつけなさい。あなたのような画家は偉大なるものを探すべきなのですから[6]。

興味深いのは、フンボルトの助言にルゲンダスが訪れるべきではない地域について事細かに列挙されていることである。フンボルトにはフンボルトの思惑があり、自身の研究に資する成果をルゲンダスの二度目の渡航に期待していたのだろう。従順であるかに思われた画家は、しかし時間が経つにつれてフンボルトの忠告に背き、南回帰線の彼方まで脚をのばすこととなる。二度目のアメリカ滞在は 15 年の長きにわたった。

---

[5] アダムは大陸軍の従軍画家であった。ナポレオンの戦争画で知られる。

[6] Citado en Diener, Pablo. *Rugendas 1802-1858*. Augsburg: Wissner, 1997. pág. 30.

図 1　『熱帯の風景』（従前個人蔵であったが 2008 年にサザビーズで競売にかけられた）
植物を描くに際して、葉の一枚一枚までを精緻に再現しようとこころみるルゲンダスの目をつうじて、ヨーロッパ人は遠いアメリカ大陸の自然を見、驚嘆した。

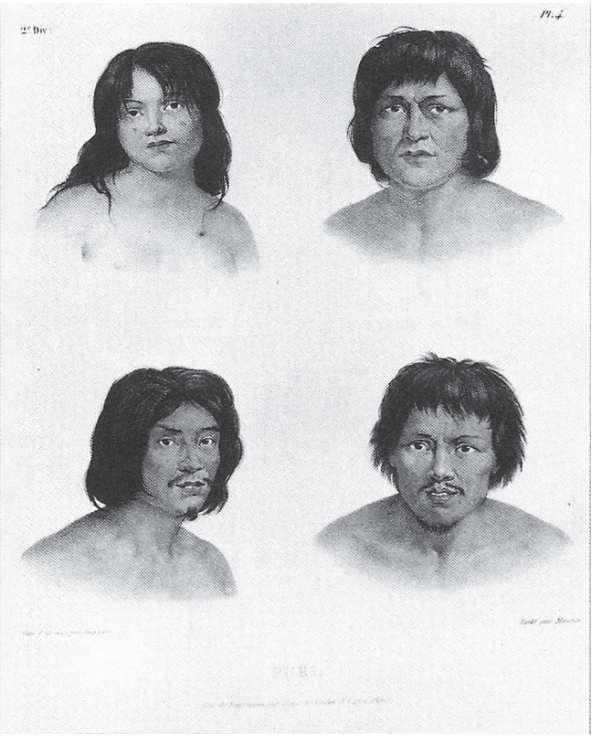

図 2　『ブラジルのピクチャレスクな旅』（1835 年）
ルゲンダスは標本のように人間を描く。いっぽうのダーウィン一行は生身の人間をイギリスに連れかえった。

絵画におけるロマン主義

最初のアメリカ大陸旅行から戻ったルゲンダスの作品がヨーロッパで熱狂的に受けいれられた理由のひとつは、その作品が示す精緻さ、綿密さであった。ラングスドルフに同行した当初の目的が博物学的調査であったことにくわえて、ドイツのアカデミーで美術教育を受けたルゲンダスは鉛筆で緻密な素描をすることに親しんでいた。また、彼が油彩の技術を習得するのはアメリカ大陸からヨーロッパに戻った後に訪れたイタリアでのことであり、最初の渡航からもたらされた作品の彩色は水彩絵の具によっている。そのことは、乾燥するまでに相当の時間を要する油彩よりも格段に速いペースで、生き生きとした色彩を画面にあたえることを可能にした。植物の葉一枚一枚を描き、人間の類型を標本よろしく描くルゲンダスは、たとえばフンボルトのような博物学者にとって都合がよかった。写真の技術が未完成であった時代に、博物学がもっとも希求したタイプの画家であった[7]。

だが、油彩の技術を会得し、広大な大陸を旅してめぐるルゲンダスの画面は次第に変容をみせる。ときに俊敏な筆致で荒々しい画面を作りあげ、壮大な自然を前にした感動こそをカンバスに定着させようとしている。さらには、崇高の概念を抱かせる峨峨突兀たる山々を描きだす。その感性はクロード・ロラン（1600 ? −1682）、サルヴァトール・ローザ（1615−1673）、ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ（1720−1778）らの風景画、廃墟画に見られるそれにかぎりなく近づく。これらの画家の作品にあって「描きこまれた人間たちは風景の巨大さを言うための矮小なものさし以上のものではなくなる[8]」が、おなじことはルゲンダスの後期作品についてもいえるだろう。くわえて、ルゲンダスがジョウゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー（1775−1851）のまったき同時代人であったことも忘れてはならない。さらに言えば、写実的な正確さを放棄した画面は、印象派の作品からの懸隔もごくわずかと言えよう。

カルロス・フランスの作品は博物学の走狗となって科学的な絵を描く画家としてではなく、反逆者としてのルゲンダスを描きだす。フンボルトの忠告に背いて南回帰線を越えたとき、ルゲンダスは自身のロマン主義の画家としての本分へと回帰する。

> 男爵の忠告に耳を貸すことなく、アメリカ大陸の熱帯地方を後にして、赤道のさらに南へと下っていくことにした。遠く離れたチリにまで。自分のおそれを受けいれることができずに（モロ、君はプライドが高くもあったからだが）、君はフンボルトの権威主義的な助言に反抗す

---

[7] カメラ・オブスクラで得られた像を固定しようとする試みは 18 世紀末からすでに研究されていた。世界で最初の写真画像はジョゼフ・ニセフォール・ニエプス（1765-1833）が 1825 年が撮影した。ルイ・ジャック・マンデ・ダゲール（1787-1851）によるダゲレオタイプの発表は 1839 年。イギリスのウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット（1800-1877）も同時期にカロタイプの研究をしていた。

[8] 高山宏「目の中の劇場　ゴシック的視覚の観念史」『目の中の劇場（新装版）』青土社、1995 年、94 ページ。

図 3　クロード・ロラン『羊飼い』（National Gallery of Art, Washington 蔵）

図 4　ルゲンダス『クリオーリョのいるアンデス山脈の風景』（Pinacoteca Universidad de Concepción 蔵）
人間はその対比によって風景の巨大さを示すための矮小なものさしにすぎない。

るためにそうしたのだと自分に言い聞かせた。そうして彼との関係が壊れてしまえば、君は（写実ではなく）感性の画家になれるのだと[9]。

フンボルトに代表される博物学が求めたのは写真のように精確な自然のレプリカであった。ルゲンダス自身、二度目の旅行に出発するに際してその価値を認めていたことは疑いを入れない。だが、標本の中の自然は殺され、ピンで止められねばならない。長きにわたるアメリカ滞在のうちに、彼は自然を殺す画家から自然にうち震える画家へと変化していく。

小説の中で、ルゲンダスはアコンカグア山中で遭難することになるが、危険をともにするのがチャールズ・ダーウィンその人であるのは、この地質学者が感性の画家の対偶であるからにほかならない。ルゲンダスは彼を殺す決意でアンデス山脈を越えて後を追い、地震の混乱の中ではからずも彼の命を救うことになる。

文学におけるロマン主義

すでに述べたとおり、二度目におとずれた南米大陸でルゲンダスは15年もの歳月を過ごした。だが、すべての土地で等しい時間を過ごしたはずもなく、滞在の期間を見れば、チリにおけるそれが群を抜いている。

1831年 7 月−1834年 3 月　メキシコ
1834年 7 月−1842年10月　チリ
1842年11月−1845年 1 月　ペルー、ボリビア
1845年 2 月−1845年 7 月　アルゼンチン、ウルグアイ
1845年 7 月−1846年 8 月　ブラジル

1845年2月にアルゼンチンへと向かう直前にも短期間チリに滞在している。二度目の南アメリカ大陸旅行でルゲンダスがもっとも長い時間を過ごしたのはその国であった。チリに何があったのか。

20世紀の半ば、ドイツ・アウクスブルクで膨大な数の手紙が発見される。これらは、「バイエルンの画家の甥の息子たちが相続したトランクに入って運よく散逸をまぬかれた[10]」もの。発見の顛末を、ルゲンダスにかんする小説を書いたもうひとりのチリ人作家パトリシア・セルダの作品の冒頭から引く。

---

[9] Franz, Carlos. *Si te vieras con mis ojos*. Madrid: Alfaguara, 2016. págs. 18-19.

[10] Pinochet de la Barra, Óscar. *Carmen Arriagada. Cartas de una mujer apasionada*. Santiago de Chile: Editorial Universitaria, 1990. pág. 10.

図 5　ウィリアム・ターナー『国会議事堂の火事』（Philadelphia Museum of Art 蔵）

図 6　ルゲンダス『サンティアゴのイエズス会教会の火事』（Städtische Kunstsamlungen Augsburg 蔵）
額縁ごしの大火は見るものに恐怖を、そして自分自身が安全な場所にあることの安堵をもたらす。

> バター色の紙に整然とした筆跡で書かれた 235 通の愛の手紙。図書館の寄贈資料担当の司書が話してくれたことには、六〇年代にバイエルンの画家ヨハン・モリッツ・ルゲンダスの遠縁の子孫が持ち込んだものだという。この子孫は 1945 年のはじめ、アウクスブルクの父の家が爆弾によって受けた被害を調べていたときに屋根裏部屋でそれを発見した[11]。

これらはカルメン・アリアガダがルゲンダスに宛てて書いたもの。彼女は 1808 年チリ・チジャンに生まれた。父親ペドロ・ラモン・デ・ラ・アリアガダ（1779−1831）はラテンアメリカ諸国独立の英雄ベルナルド・オイギンス（1778−1842）やホセ・サン・マルティン（1778−1850）とも親交のある軍人にして同地選出の議員だった。1825 年カルメンは 10 歳年上のドイツ生まれの軍人エドゥアルド・グティケ（1798−1858）と結婚する。1831 年に父親が亡くなるとカルメンは南部に地所を相続した。ルゲンダスのチリ到着の翌年、彼女はリナレスの地所に彼を招待する。以降、両者のあいだに緊密なやりとりが生まれる

> 彼〔ルゲンダス〕はまた、南部の町タルカのカルメン・アリアガダの家のサロンの常連であり、会話の調子はその書簡のやりとりを通じて克明に記録されている。手紙の往来が頻繁になるにつれ、サロンの女主人と画家のあいだにはたちまち情熱的な恋愛関係が生じた。個人的な親密さにくわえて、書面上の会話はたとえば、トマス・モアやシェイクスピア、シャトーブリアン、バイロン、ユゴー、さらにはアルゼンチンのエステバン・エチェベリアの劇にまでいたる文学的主題にもおよんだ[12]。

複数の外国語に通じ、高い教養を持つ彼女との交流はルゲンダスを魅了した。カルメンもまた、自由に旅を続けるこの異邦の画家に心を奪われたことだろう。ルゲンダスがヨーロッパに戻り、彼より返事が来なくなってもなお彼女は 1851 年まで手紙を書きつづけた。その理由を考えるにあたっては、レオニダス・モラレスのつぎの指摘は傾聴にあたいする。

> 手紙のエクリチュールはある不在を想定している。手紙はそこに、わたしがいる場所にいない誰かに、けっして超えることのできない距離によってわたしからへだてられた誰かに向けて書かれている。相手がほとんど幽霊のような遠い輪郭にすぎないとき、しかし手紙を介して、呪いのようにして、手紙を書いているあいだは思い描き、そこにいるかのようなふりをするのだ。〔中略〕この幽霊じみたコミュニケーションの戦略こそ、カルメンが不在の対象と交わす

---

[11] Cerda, Patricia. *Rugendas. Barcelona*: Ediciones B, 2016. págs. 5-6.

[12] Diener, Pablo. *Rugendas 1802-1858*. Augsburg: Wissner, 1997. pág. 41.

図 7　ルゲンダス『カルメン・アリアガダの肖像』（Museo O'Higginiano y de Bellas Artes de Talca 蔵）
フランスの小説においては、こちらは精彩を欠いたほうの肖像画。

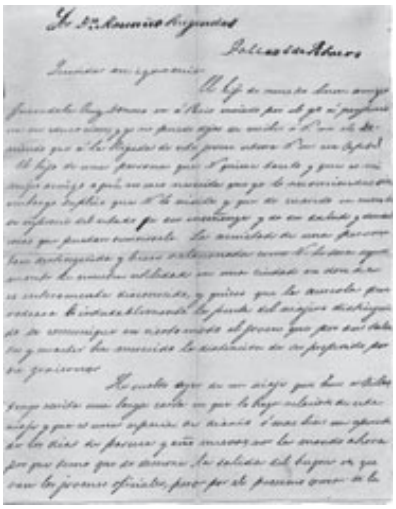

図 8　ルゲンダスに宛てたカルメン・アリアガダの手紙
（Museo O'Higginiano y de Bellas Artes 蔵）
端正な文字が並び、書き損じは皆無。カルメンは練達の書き手であった。

ことを望む対話の形をとってカルメンが「自己を救済する」ことを可能にするものなのだ[13]。

強固な因習が支配する祖国にあって、ルゲンダスのように自由に生きることができなかったカルメンが、目の前に不在の彼に手紙を書くことによって救済を得ていたというのは的を射た指摘だろう。

ルゲンダスがカルメンに書きおくった手紙はうしなわれているために、今日知ることのできるふたりの手紙のやりとりは一方通行となっている。しかし、受けとり手であるルゲンダスの位置が空白であることによって、カルメンの手紙は対話であると同時に独白でもあるような、特別な次元に到達する。

手紙がそのまま文学作品になるという伝統はモンテスキュー『ペルシア人の手紙』（1721 年）、ジャン・ジャック・ルソー『新エロイーズ』（1761 年）、ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ『若きウェルテルの悩み』（1774 年）などに連綿と受け継がれていく。カルメンの書簡を編纂し刊行したオスカル・ピノチェ・デ・ラ・バラはそれゆえに彼女を作家と見なし、そればかりか彼女を「チリ最初の女性作家」とするギジェルモ・フェリウ・クルスの言葉を引いているのである。

> ドニャ・カルメンの知性はその時代のチリにおいてもっとも素晴らしい価値をもつ女性の高みへと彼女を引きあげる。彼女は最初の女性作家だ。書簡のジャンルで彼女に比肩するものは誰ひとりとしてない……。ドニャ・カルメンは真の知識人だ。文学はこれほど重要な作家を見うしなってはならない。この国はチリの批評的思想の歴史におけるこの価値を見うしなってはならない[14]。

カルメンの手紙を書簡体小説として読むとき、本来の受けとり手であったルゲンダスは架空の名宛て人として文学作品中の登場人物へと変化する。

1836 年 10 月 11 日、カルメンはルゲンダスに宛てて書いている。

> あなたの手紙を読んで、その愛の甘やかな表現を目にして、この魂は幸福で満たされたの！
> ああ、あなたの愛はわたしの心がまだ幸せをかんじることができると教えてくださったわ！
> あなたに愛されるという何物にもかえがたい幸せ！　それがわたしの悲しみをうち砕き、この人生を愛おしいものにしてくれるの[15]。

---

[13] Morales T., Leonidas. “Carmen Arriagada: la carta como salvación.” *Cyber Humanitatis*. Núm. XIX (2001). págs. 5-6.

[14] Citado en Pinochet de la Barra, Óscar. *Carmen Arriagada. Cartas de una mujer apasionada*. Santiago de Chile: Editorial Universitaria, 1990. pág. 15.

[15] Citado en Pinochet de la Barra, Óscar. *Carmen Arriagada. Cartas de una mujer apasionada*. Santiago de Chile: Editorial Universitaria, 1990. pág. 54.

シャトーブリアン、バイロン、ユゴーの熱心な読み手であったカルメンの手紙によって、不在のルゲンダスは文学におけるロマン主義を体現する人物となるのである。

カルロス・フランス『僕の目で君自身を見ることができたなら』

フンボルトの忠告に背き南回帰線を越えることで感性の画家となり、絵画におけるロマン主義を体現することになったルゲンダス。自らの死後、一世紀近くを経て発見された、かつてカルメンから受け取った手紙によって文学におけるロマン主義を体現することになったルゲンダス。どちらもが、現実のルゲンダスに起こった変化である。しかし、文学的トポスとしてのヨハン・モリッツ・ルゲンダスは、アウクスブルクの画家の伝記的事実から出発しながらも、作家カルロス・フランスの手でより魅力的に昇華される。

二人称というめずらしい語りを持つ小説『僕の目で君自身を見ることができたなら』の中で画家はバルパライソの港でカルメン・アリアガダに出会い、恋に落ちる。かつて博物学に奉仕する画家であったルゲンダスは精確無比な風景を写しとるための光学装置カメラ・オブスクラの仕組みを応用してカルメンを籠絡しようとするが、かえり討ちにあう。満たされない思いを抱えながらも互いに惹かれあうふたりは、ルゲンダスがカルメンの肖像を描くという約束を口実にして、隠れて愛しあうようになる。

フランスの作品は、現実におこった出来事を巧みに取りいれる。冒頭に挙げたコンセプシオンの大地震ばかりではなく、カルメンの肖像画制作、ダーウィンのフジツボにかんする研究、はてはルゲンダスの画題の数々。また、作中では時間軸を交錯させながら、ルゲンダスの死後およそ半世紀を経てカルメンが愛人に宛てて書く手紙がくり返し挿入される（ルゲンダスは 1858 年、カルメンは 1900 年に没した）。ルゲンダスの絵画、カルメンの手紙、ダーウィンの航海日誌、すべてが渾然一体となって、その希有な小説世界を作りあげている。語りが二人称であることも、前節で述べたことを念頭におけば偶然というよりも必然とみえてくる。

20 年におよぶ執筆準備期間を経て完成されたこの作品について、作家はあるインタビュでつぎのように話している。

> この小説のために調査をおこなっていた二十年のあいだに、ルゲンダスとアリアガダの恋愛の出会いとダーウィンのチリ海岸の通過が同時期に起こったことを発見し、そのことはじつに豊穣な劇的衝突の可能性を与えてくれた[16]。

[16] Soto, Máximo. “Retrato de una Madame Bovary del Cono Sur.” *Ámbito*. 25 de mayo de 2016.

ヨハン・モリッツ・ルゲンダス、カルメン・アリアガダ、そしてチャールズ・ダーウィン。この三人が人生のある時期においておなじ国にいたという偶然は、作家にとって物語を起動するための霊感源となった。しかし、フランスの作品が凡百の歴史小説、恋愛小説から一線を画し、感動を与える理由は、それがヨーロッパとアメリカというふたつの世界の幸福な出会いを描いているからにほかならない。

博物学は殺し、集め、分類する。しかしルゲンダスは写真のように記録する画家であることをやめ、感性の画家として生まれかわる。そして、土地の女性と恋をする。そうすることで彼はより深くアメリカ大陸を知る。「ルゲンダスにとってカルメン・アリアガダが、アメリカ世界を理解するのに寄与したもっとも重要な人物であったことに疑いの余地はない[17]」とルゲンダス研究の泰斗パブロ・ディーナーは言う。傑作『トリニダー・サルセドの誘拐』はカルメンからもたらされた情報をもとに描かれた[18]。

先に「ふたつの世界の幸福な出会い」と書いた。額縁のなかに風景や文物を写しとっていた時代のルゲンダスは、博物学の大義のもとにヨーロッパによるアメリカ大陸の占有行為の片棒を担いでいたにすぎない。だが、その画風が変化し、またアメリカ大陸のひとりの女性と交わした手紙によって文学作品の登場人物のひとりになることで、ルゲンダスは絵画と文学というふたつの領域におけるロマン主義を体現することとなった。文学的トポスとしてのヨハン・モリッツ・ルゲンダスが可能にしているものは、収奪や占有によるのではない新旧両世界間の関係の樹立なのである。

---

[17] Diener, Pablo. *Rugendas 1802-1858*. Augsburg: Wissner, 1997. pág. 41.

[18] Diener, Pablo. *Rugendas 1802-1858*. Augsburg: Wissner, 1997. págs. 44-45.

図 9　ルゲンダス『襲撃（マロン）』（個人蔵）

図 10　ルゲンダス『トリニダー・サルセドの誘拐』（個人蔵）
ルゲンダスはインディオの襲撃で誘拐された女の名をカルメンにたずねた。

参考文献

欧文

Cerda, Patricia. *Rugendas. Barcelona*: Ediciones B, 2016.

Diener, Pablo. *Rugendas 1802-1858*. Augsburg: Wissner, 1997.

Franz, Carlos. *Si te vieras con mis ojos*. Madrid: Alfaguara, 2016.

Castro-Klaren, Sara (Ed.). *A Companion to Latin American Literature and Culture*. Oxford: Wiley-Blackwell, 2013.

Morales T., Leonidas. "Carmen Arriagada: la carta como salvación." *Cyber Humanitatis*. Núm. XIX (2001). [https://web.uchile.cl/publicaciones/cyber/19/lmorales.html] Retrieved 5/01/2023.

Ortiz Domínguez, Efren. *Johann Moritz Rugendas: memorias de un artista apasionado*. Bógota: Luna Libros, 2013.

Pinochet de la Barra, Óscar. *Carmen Arriagada. Cartas de una mujer apasionada*. Santiago de Chile: Editorial Universitaria, 1990.

Soto, Máximo. "Retrato de una Madame Bovary del Cono Sur." *Ámbito*. 25 de mayo de 2016. [https://www.ambito.com/edicion-impresa/retrato-una-madame-bovary-del-cono-sur-n3940552] Retrieved 5/01/2023.

邦文

グリーンブラット、スティーブン『驚異と占有』荒木正純訳、みすず書房、1994 年。

ダーウィン、チャールズ・R『新訳　ビーグル号航海記』荒俣宏訳、平凡社、上下巻、2013 年。

高山宏「目の中の劇場　ゴシック的視覚の観念史」『目の中の劇場（新装版）』青土社、1995 年。71−153 ページ。

富田広樹『エフィメラル』論創社、2020 年。